

うたがひの心のひまぞなかりけるわが身ひとつの數ならぬより  
 後の世によも人ごとはしけからじたゆとなわびそしばしまて君  
 ぬれむとは思ひしことよ人言のしけきが下に木がくれしより  
 津國のながらへてとも契りしは絶るはしにてありけるものを  
 袖のうへに人のなみだのこほるとはわがなくよりも悲しかりけり  
 あやめ草引くや五月の玉さかに來ては鳴きけるほとよぎすかな  
 瀧の上のしめ野に咲けるみそ萩のそのみそかごといつか忘れむ  
 曉のをしの一聲鳴きわかれかへるたもとに霜ぞこほれる  
 あづまにありける年の秋たよりにつけて人のも  
 とへつかはしける  
 ゆふ暮の露も結べる玉章をなきてつたへよ天津かりがね  
 返し  
 よみ人しらす  
 露よりも雨としぐれてふるさとの涙は悲しかりと啼きつる

桂園一枝花

雑歌上

朝

思ふ事ねがめの空につきぬらむあしたむなしきわが心かな  
 題しらす

燈のかけはそむけてねたれどもさやかにのみぞ夢は見えける  
 かぎりなく悲しきものは燈の消えての後の寐覺なりけり  
 つくぐとももの思ふ老の曉にねがめおくれし鳥の聲かな

海

海ばらの沖の高くもみゆるかないくへ積りし水にかあるらむ

磯浪

いそ崎のまつの幾世のなれぬらんさてしもあらし浪の音哉  
題しらす

玉くしけふたみの浦は明けにけり打いづる波の數みゆるまで

海邊眺望

あし屋がたみる拾ふ子にこととはんまゆ引きたるや紀路の遠山

古渡雲

夕されば水底すみて澤田川雲の影のみたちわたる見ゆ

船

松浦ぶねいたてになりぬ大島のせとの高汐いまか落つらむ

汐時の風の心をとる楫にはやくもあたる浪の音かな

舟行夜已深

堀江川あかつき汐やさし來らむ棹の音ふかくなりまさるかな

湖上舟

佛はたが朝妻の舟屋かたむかしのうかぶ波のうへかな

男をんな舟にのりてあそぶ

わがせこが棹とる池の島めぐりぬらす雫もうれしかりけり

峯

大空のてる日の影もおよばねば解けたる世なきふじの雪かな

池

しながどり猪名山まつにこちふけば遙にさわぐこやの池水

田

賤の男がうつや荒田のあらためて作るにはあらずかへす道なり

市

朝なく出る明日香あすかの市人はきのふをけふにかふるなりけり

柚

さどなみの大津の宮のあれしより榮ゆるものはみをの柚山

閑居

いかばかり深き心のおくなれば山かけよりもしづけかるらむ

閑居夢

空蟬の世に木がくれてすむ宿の心に夢はならはざりけり

わが山陰をはなれてしばらく観鷺亭に移りすみ

ける比よめる

山よりも深き心のありがほに市の中にもかくれけるかな

山家

山深くながめくくして雲水のゆくへあだなる世とは知りなき

何ゆるゑに山には住むと人とはどこたへんまでの心ともがな

題しらす

中々にのがれもはてすすむ山のふかきこゝろを知る人ぞなき

山家嵐

くるよより松に吹たつわか山のあらしの末をたれかきくらむ

山家水

うき世をばすみはなれても山の井のみづから濁る心をぞ知る

山家秋

山賤となりにおける身のこゝろありてなぞ秋風にも思ふらむ

山家鳥

わが庵はあまりに山の奥なれば鳥の聲さへめづらしきかな

山家人雞

我宿の牆ねがくれのつどらをりくる人あらば待つ人にせむ

たま〜は人も明けつる奥山の杉のとほそは苔むしにけり

山家客來

わびぬればことづてだにもうれしきに山松の戸を君ぞ明けたる

物の音のたえず聞ゆるをきよて

山ざとをさびしきものと思ひしは君が世知らぬ心なりけり

古松

すみよしの岸の姫松なみよせずなりにしのちも幾世経ぬらむ

松色映水

大堰河ふちの緑やうつるらむ深くも見ゆる松の色かな

人の賀に松添榮色といふこころを

榮えゆく君が宿にし植ゑざらば松もなべてのみどりならまし

對松争齡

子日する千世のためしに君は松まつは君をや引かむとすらむ

三寶院の御別業省耕亭の十二景の和歌おほせに

よりて奉りける中に彈琴邱松といふありこはそ

のかみ重衡の中將をうしなひ參らせし最期のと

き琴ひき給ひしところなりといひつたふるを

松風も夕にせまる聲すなり玉の緒よりやしらべそめけむ

伊勢なる本居宣長都にありけるほど嵯峨山松と

いふ事をよませけるによりて遣しける

さが山の松も君にしとはれずば誰にかたらむ千世のふること

播磨の別府なる手枕の松のかたに

萬代は夢なりけりと手枕の松も老いてや思ひ知るらむ

東六條の東殿なる涉成園の十三勝の和歌よみて

たてまつりしその中に五松塙といへるを

五本のいつさだめたる陰なれば千世さへ松のかはらざるらむ

河原のおとどの姫君うまれさせ給ひて御行始に

神樂岡なる春日の御祖の大神にまうでさせ給ひ

けるついでわが東塙亭に御こし入らせ給ひける

がいたくむづからせ給へるによみてたてまつる

松のうへにはじめてすだつひな鶴の千世の聲こそ高く聞ゆれ

鶴

かぞへても知るらむものか蘆たづの久しと思ふや千歳なるらむ  
あしたづのふめる真砂の跡をみて千代といふもじは造り初けん  
鶴ひなをつれたる

千世のうへに千世をゆづるの聲すなり子を思ふ心限りなき哉

雞

けふもはや申のさがりになりぬらんとぐらにのほる庭鳥の聲  
ともすればふせ籠こにこもる野ののせばくも世をば思ひけるかな  
大空に飛立ちかねて打羽ぶきかけろと鳴くがあはれなりけり  
はなち鳥  
つぐら籠こを明けてやりつる放ちどりわがのがれしと思はざらなむ

窓燈

打なびく窓のともし火くれ竹の音せぬ風をいかに知るらむ  
月見むと明けたるまどの灯あかりのきゆる心はこゝろありけり

雨中燈

夜とともに物思ふ閨のともし火はしめるを雨にならはざりけり

題不知

燈のかけにて見ると思ふまに文あまのうへしろく夜は明けにけり

旅行

草枕たびの空こそ悲しけれ野にも山にも知る人はなし

山寒雲

しら雪のつもらむけさの山の端はまづ雲にこそうづもれにけれ

河雪

こえかねし浪かと思えて大堰川るせきもたわにつもる雪哉

濱雪

海人のみやけさうち出のはま千鳥あらぬあところ雪に見えけれ

海邊雪

烟のみうづみのこして鹽がまのうらさびしくもつもる雪かな

常磐木雪

玉つばきふたよびみたび花さきて雪にぞ陰はあらたまりける  
はつせ山さくらが枝はまはるにて檜原ぞ雪はさかりなりける

晴雪落長松

松が枝の下折れたりと思ひしはくだけてゆきの落つるなりけり

晩頭鷹狩

是やこの野守のかごみはしたかのかけさやかにも見ゆる月かな

神樂

月をまつたび寢の床のさよの葉に嵐ふくなりさらしなの里  
駿河守昌敷がこしの國へたび立けるせんしける

時によめる

たはやすくやがてといへど白山のゆきてはかへる程もこそふれ

兒山紀成がいまだ公にもつかうまつらざりしそ

のかみしばらく都に遊びて伊勢の故郷へかへり

ける時蹴<sup>あひ</sup>上の里まで送りてよめる

夏山の下はふつぐら別るとがくるしきまではいつ馴れにけむ

垂雲軒夢宅が信濃なる伊奈の故郷へかへるを送

りて

玉の緒は長くみじかき世なりけり又あはざらむまたや逢ふらむ

師走の末つかた越後國寺泊なる圓雅法師都をた

ちて近江國までくだりて故郷へ歸らんは年こえ

むもはかり難しといふに

同じくはみやこへかへれ歸<sup>かへる</sup>山雲には道もあらじとぞ思ふ

池田基永妻の桂舟とともにしばらく故郷へかへ  
るべき事いできぬとて暇申に來たるときによめ  
る

君がゆくいよの松山年ふともいよくまたむ伊豫の松山

内山眉生萩原貞起わが塾を出て信濃國へかへり  
けるがふたよびのほり來て學ばむ事をのみ云ふ  
に

信濃路の木曾のかけはしかけたれどあやふき物は契なりけり

述懷

かくばかり愁ひなき世を歡びのあるべきものと思ひけるかな  
いづくかはひ思の家にあらざらむよそめ樂しき世にこそありけれ

夜述懷

明けぬればかならずさむるものにしてぬるよひくぞはかなかりける

獨述懷

はかなくて木にも草にもいはれぬは心の庭の思ひなりけり

懷舊

めのまへにむかしくとなりゆきて今なき世こそ悲しかりけれ

懷舊淚

憂をへてよりける年の緒をよわみ亂るよ玉は涙なりけり

寄夢懷舊

老いぬればいとむかしの見ゆるかなわかきは夢の心なりけり

往事渺茫都似夢

思ひ出る事も残らず夢なればさめしともなきわがねざめかな

無常

あら磯の岩うつ波による貝のからはしばしもとまりけるかな  
無きを夢有るをうつよとおもひけり猶世中をよの中にして

寄風無常

消ゆらむもとまるも露のしばらくを何秋風のさそひ分くらむ

寄雲無常

行めぐるうき世の雲のむら時雨終にはぬれぬ人なかりけり

題しらす

まづゆくをしたひくつひにみなとまらぬ世こそ悲しかりけれ

崇徳天皇の六百回御忌に

松山に浪こえざらば濱ちどりかへりて跡はのこらざらまし

八條相國六百五十回の御わざおこなはせ給ふに

秋夢といふことを給りてよみて奉りける

遠ければ昔にいたる夢もなしさばかりながき秋の夜なれど

五月三日なりけん新皇嘉門院御はうぶりの夜明

けて雨いみじう降りければよめる

久かたの雲のうへなる涙こそさみだれそむるはじめなりけれ

拙庵せしに人しれず契りおける事ありて年ごろ

へたる後世になき便の聞えければ驚きてよめる

よしやわれきよえたりとも山彦のむなしき聲を誰にこたへむ

小澤蘆庵身まかりし時よみてつかはしける

親しきはなきがあまたになりぬれどをしとは君を思ひける哉

女の思ひにこもりける比武者小路左中將の君よ

り竹といふ酒にそへておくり給へりし

數ならぬいさよむら竹うきふしの世をなぐさむるつまとだになれ

御返し

なぐさめて君よりくれの竹なればまづ涙には染めじとぞおもふ

をさなき子をうしなひけるとき

おひしきてとりかへすべき物ならばよもつひら坂道はなくとも



同じ比白朮の花を人のおくりたるに  
 世中をうけらの花の開かすてしほむとならば咲かずやはあらぬ  
 誠拙せしの初月忌に歌あまたよみて手向ける中  
 に

何ぞ此かたみがほにも空しくてとまらぬものを残しおきけむ

或人いまくとなりておのれに歌ひとつと乞ひ

おこしたるによりてつかはしけるこの歌を額に

あてながらやがてむなしくなりけるとなむ

長月の末の露とはおもへどもそのおき所はなのうへなり

昌敷が病せまりて後加級の宣下かうぶりし事を

其子さがみの守嘉之がもとより申おこしたりけ

るときよめる

見えすなる影ぞかなしき位山のほるときくはうれしけれども

大路にすてたる子

落ちたるもひろはぬ御世を命にて捨てにし親の心なるらむ

何がしのせしより狗子の圖かたに賛えん乞ひたる

ゑのころは何の心もなかりけりなにのころかありとたづねむ

猩々の舞圖

よく諷うたひよくまふみれば思ふ事よになきのみや人に似ざらむ

猿藤のかつらをよぢたる

引とめてとまる春とやおもふらむけに人よりはおろかなりけり

琵琶ほうし

おのが見ぬ花ほととぎす月雪を四の緒にこそ引うつしけれ

越後獅子

みこし路は雪深みぐさ花に來てたはるよさまのあはれなる哉

尉じゆうと姥うばのかた

相生の松におく霜神さびて千世のすがたとあらはれにけり

白藏杖をつらにつきてたてる

歸らんや今はいかにせむ此岡に枕もすべく夜は更けにけり

末廣といへる猿樂の圖

たのしさをわれも、たはん春日山笠とさしたる天の下陰

同じく靉猿

やといひしあら木の眞弓引はなれ今はうつほのうつよなきさま

同じく千鳥

濱千鳥おのがちりく、啼すてて跡こそみえね沖津しら浪

遊女の物おもひたる

おしなべて誠なしといふ濡衣の袖ばかりだにほす人もがな

若きをとめの泥孩兒をいだきて雪の中をあゆむ

圖

かさならぬ年のうちよりわかき妻めくものは心なりけり

秋の野はらに女の鬘髻を見て處女のにけさる圖

かへりみよこれも昔ははな薄まねきし袖の名残なりけり

竹に雀のやどり靡きたる

品よくもとまりけるかななよ竹のよにうたふなる一ふしやこれ

蝶ふたつ空にとぶ圖

花のうへに君が放ちし蝶もなほ天にあらばと契りおきけん

安倍仲麿を明州の海邊にて餞したる

よるゆけど月の光し清ければあらはれわたる唐にしきかな

濱主が和風長壽樂まふ圖

八百日行く其濱主の老の浪わかきにかへす舞のそでかな

陵王まふ圖

四方のうみさわぎし浪は立かへりをさまる時の聲となりనికి

紀氏

打わたす紀の遠山のなかりせば明石のうらもむなしからまし  
 芳野川の岸にたちて歎冬見給へる圖  
 ながれてはいとど影こそ匂ひけれ紀の河上のやま吹のはな  
 渡邊の綱その姨と物がたらふ圖  
 謀るには手もなきものと思ふらむとりかへされぬ報ある世を  
 西行上人猫の香爐もて座したる  
 中々に心もとめぬ空だきのかをりや富士の見なるらむ  
 芭蕉翁  
 ふりにける池の心は知らねども今も聞ゆる水の音かな  
 うつほの俊蔭の卷なる北山ごもりの圖  
 久かたの月のかつらの木實もやとりもてくらむそふ光かな  
 常盤御前子どもをつれてふどきにあへる

かきくらす雪に伏見の吳竹の下折りたるやみさをなるらむ

湯谷ふみ見たる

故郷の花のたよりはかけたれどかへりわづらふ春のかりがね

王昭君

四の緒の半月もかきくらし涙しぐるよみちのそらかな

李夫人

中々に終のけぶりのまよならば二たび世にはこがれざらまし

李夫人去漢皇情

あくがるよ心のうちのけぶりにもまづ佛は立かへりけむ

老萊子

子のために親のをさなくなれるすら悲しきものを悲しからずや

韓信が市人の股くゞる圖

かり初の市の妻屋の忍ぶ草うるたねなりと知る人ぞなき

東方朔みつの桃をぬすみたる圖

萬代は袂につまみえたれどもかくれぬものは憂名なりけり

關雲長

桃園に契一たび結ぶ身の落ちぬその名は萬代までに

王質

斧の柄はくたしてかへる山路にも知る人えたり白菊の花

虎溪の三笑

もろこしの芳野の夢の浮橋か現ともなくかけはなれけむ

李白が酔さまたれし圖

みな底に沈める月の影見れば猶大空のものにざりける

三寶院の御門主より許由が瓢を梢にかけてかへ

りみたるかたをよませ給ふに

ぬらさじとくれしこれすら煩はし受らるべしやあめのしたより

また蘇武が雁の足に文ゆひつくる

そらごとを只かりがねの玉章も君がまこととなりけるかな

また淵明が琴ひく

世の中にあはぬ調はさもあらばあれ心にかよふ峯のまつかぜ

面壁の達磨

あまりにも背きくゝて世の中の月と花とに又むかひけり

布袋の後むきたる

なしといひ有りとうたひて世の中のむくかたにのみやる心かな

ゆくゆくかへり見したる

宵のまに入りぬる影をかへり見て待つほど遠し有明の山

月を指さしたる

明けゆかむその曉を待わびて月のみやこをさす人やたれ

賓頭盧

身をつみて佛のこゝろ知られけりなづるはさこそ嬉しかるらむ  
 寒山拾得  
 あひにあひしひとつ心にくらぶれば似たるばかりの秋の夜の月  
 丹霞佛像をやく  
 御佛も炎ほのほを出でよこの世からうしの車の我みちびかむ  
 親子蝦をすくひてくふ  
 雪にだにくるふ跡なしおり立ちてすくふも空の霧か霞か  
 野寺僧歸  
 あたご山檜しんみがはらにくらしけむさが野を分くる墨染の袖  
 野寺隱喬木  
 中々に立かくしたる一むらの松ぞ野寺のしるべなりける  
 臺頭有酒  
 いざくまむそのかのもたひもて來なん臺うたなの上に月はのほりぬ

雑歌下

正月一日おきの守豊はらの文秋來りて笙吹しやうきな  
 どしあそびけるによめる  
 ためしなく治れる世をくれ竹のみをはむ鳥の聲にたつらん  
 いかにして吹つたへけん古いにしへのあしがら山のみねのまつかぜ  
 むつき三日なりけむ雪いたう降りけるあした清  
 岡しきぶの大輔の君に従ひて比えの麓なる詩仙  
 堂をとぶらふ柴の戸推明けるほどに初音たかく  
 聞えたるはかの鶯宿梅のあたりにやなどのたま  
 ふによみ侍りける  
 梅の花さかばといひし我よりもさきにとひける鶯のこゑ

をりたる梅を

あはれにも咲きこそ匂へ梅の花折られたりとも知らずやあるらむ

登壽院法印了敬がもとより若菜一籠いとをかし

けなるをおくりたるこはやむ事なき御わたりに

堺なる或人の昔よりたてまつりなれたるを此春

おなじかたにしつらひておこせたとかいつの

比より奉り初しそも今は知られずと聞きてよみ

て遣しける

摘そめしはじめなければ行末も遠里小野のわかななるらむ

せんす萬歳

石上いそのかみふるき鼓はこけむしぬされどもひどく萬代の聲

三毬打さんぎうちやう

くれ竹のさはるふしなき世なりけり煙に聲はたてずともよし

二月のはじめ八坂にて京を見やりてよめる

織りかけし都のにしき青柳のたての絲のみ見えわたるかな

稻荷詣

いなり坂杉の青葉をかざすこそまだ花さかぬしるしなりけれ

涅槃會ねはんかい

世中の花のあそびにくたびれて一ねいりせる君が手まくら

西行上人の影かげ供に春月言志と云ふ事を

後の世のねがひもさぞなみちぬらむ花にかくれし望月の影

春釋教

春されば雪のみやまに啼く鳥の聲も長閑になりやしぬらむ

或人の追善の題に幻世春來夢

かの國の花にやどりて思ふらむこの世はてふの春の夜の夢

うかりし事ありて籠りをりける春望南亭自体が

庭の花や盛なりとていつの日かならずなどい  
ひ契りたるに其日しもひねもす雨降りければよ  
みておこしたる

花のうへに雨のふりこぬ里あらばところかへても君をまたまし  
かへし

わがとはどいづくのさとかぶらざむ涙の雨と知らぬ君かな

世繼直員が家に藤の宴したりける日えまからで

よみてつかはしける

わがやどにもものうけにふる春雨はねたくも花のしづくなるらし

四月七日なりけん年ごろわが塾にありける篠澤

隆壽粟津の松原にしておのがほい遂けたりし時

その事とりくに傳へていまだ都にさだかなら

ざりければやむ事なきみわたりよりも其虚實い

かにいかにとたづねとはせ給ふことしばくな

りければよみ侍りける

ほととぎす時まちいでて名のりつる聲雲井まで聞えける哉

くらべ馬を

神山のやまびことよむ聲すなり宮人今や駒くらぶらし

馬くらべ追すがひてぞ過ぎにける月日の逝くも斯くこそありけれ

糸の糺のすぢみにまかりけるに思ふことありて

人の世は浪のうきもに咲くはなのたどよふほどぞ盛なりける

六月の末やみおとろへて夜たどねられぬに

燈にきえをあらそふ夏蟲の影ともわれはなりにけるかな

みな月の有明づくよつくふとおもへばをしき此世なりけり

初秋薄

露おかばいかにせんとの花すよき袂せばくもたちし秋かな

月の前に月草たてるかた

よひく月に月をうつしの色ならば心やそめむ秋のかたみに

東のかたに遊びける頃雁来といふ事を

はるぐとかけて來にける初雁の翅つばきのふみを知る人もなし

こちたのみなくおほえける頃松蟲の鳴くを聞

きて

聲をのみ友と聞きつるまつむしの身の行へにもたぐふ秋かな

葉月のはじめなりけんむすめ孝子を伯耆守寛寧

がもとにつかはしたりける歡びをとて人々つど

ひて其夜もすがら舞かなでなどうちさわぎける

中にひとりひそかにうたへる

うれしさをつとみかねたる袂より悲しき露のなどこほるらむ

はつき十六日の夜なりけむ頼襄が三本木の水樓

につどひてかたらひ更してよめる

すむ月に水のこころもかよふらしたかくなりゆく波の音かな

白雲にわが山陰はうづもれぬかへるさ送れ秋の夜の月

白河の紅葉をしみにまかりし時

いなごとぶ淺茅が下を行く水の音おもしろしこゝに暮さむ

三月十四日立坊の供御中山頭中將の君奉行にま

り給ひていたゞき給へるを其内四品ばかり大

御器ながらおくり下し給へるをかしこくもいた

だきて

花さそふ大内山のおろしをばうけたるそでに露さへぞちる

薄暮松

よさのうみの湊にいりしかひもなく松のは見えぬ夕まぐれかな

社頭杉



ことむけしこれやしるしの銚杉も神さびたりな白鳥の宮  
竹不改色

吳竹は千世のもと末みどりにて枝さへ葉さへかはらざりけり  
從五位下宣下蒙りし時よめる

けふぞ知るふしてあふけばくらる山いよく、高き君がめぐみを  
大納言の君より拜敷を祝ひ給ひ下されてかすか

ず御たまものの上に  
近き世に例たしまれなるめぐみうけて榮えそふらふ老のゆくする

とよみ加へ給はりたるいとかたじけなみ奉りて  
齡よほのみ世にまれなりと思ひしは此御めぐみを知らぬなりけり

くらる山たかねの月のかけなくばしけき籠をいかでわけまし  
三位中將の君よりも

めぐみしる大内山のまつの上にふたよび千世の色やみすらむ

といはひ給ひ下されたるに

二度の千世をば君にゆづりおきてめぐみをまつの陰にかくれむ  
題しらす

袖の上におちたる見れば雲井とぶたづのくはへし稻葉なりけり  
三條の君より實房公の御集を給りてこの中より

御影の上にしるしおかるべき御歌えらびてよと  
ありければえらみてたてまつるにかいそへたる

藻くづだにまじらばこそはえらびても清き渚なみの玉はひろはめ  
富小路左兵衛佐の君より山吹に御歌そへて給り

ける御返し  
山吹の花にむすべることのはの露はこがねのたまにざりける

元服  
むらさきのはつもとゆひにかくるかな北の藤浪榮えゆく世を

比叡の麓なる渡邊某が八十賀に  
 百とせの高ねにのほれひえの山はたちばかりは今ぞかさねむ  
 加藤氏の母の七十賀に寄松祝といふことを  
 千世ふべき君がかざしの松の上にくはふる藤の花かつらかな  
 大和守久敬が七十賀に  
 かきあはせしらべあはせてうたふらむ君が手なれの大和ことは  
 八田知紀が母の七十賀に寄葵祝といふ事をよみ  
 て遣しける  
 たらちねのみおやのもりのあふひ草かくらむ千代はいのる子のため  
 人の七十賀よめる中に  
 なよそぢの心のこまにまかせつちとせの坂ものりやこゆらむ  
 七世へし其則とほき斧の柯の末ながしめに君ぞ見るらむ  
 或人の四十二の除厄を賀して

のほるべき千とせの坂もしら雲のよそぢの上に見えわたるかな  
 和泉なる里井の家に七人の子ありてあるは其家  
 に富み或は外にさかえたるを賀してよみて遣し  
 ける  
 仰ぎてもおいやたのしむ七子のさやにそれぐをさまれる世を  
 おなじ國人の七十賀に  
 七回の玉の緒ながく見ゆる哉ちとせよろづ世ありとほすらむ  
 夜過關屋  
 木幡山ふけたる月にせきもりのゆづるつまひく音きこゆなり  
 旅  
 いにしへの草の枕は知らねども旅はねざめぞ露けかりける  
 あしびきの山こえねこえこえくれど旅はうきやといふ人もなし  
 旅宿曉

曉と夜はなりぬれど鳥の音もきこえぬ山にたびねしてけり

他郷涙

わが袖に知らぬつゆこそほれけれ草木が上はかはらぬものを

遣唐使餞別

浪速なにはがたみをつくしまでやらませばおなじ別もなぐさめてまし

蔭山秀雄霜月ばかり君の御使にて江戸におもぶ

きける馬のはなむけしけるついでによめる

奥えぞの果まで驛く君が代に開けぬ道はあらじとぞ思ふ

雜體

長歌

江戸にありけるころ四月なかば原庭なる葵園に

つどひて歌よみける日しも終日あめふりければ  
いへる

春雨に おくれし雨か 五月雨に さきだつ雨か

春雨に おくれし雨ぞ しかれこそ 鶯な けれ

五月雨に さきだつ雨に あらねばぞ 初時 鳥

忍び音もせぬ

猪名の里なる壽性尼より淡海の濱づとなりとて

螢あまたうすもの籠に入れて贈りける時よみて

つかはしける

潮みてば 玉藻とうかび 汐干れば 眞砂にたちて

時つかぜ 吹きのままにく 沖津浪 立のさわぎに

なづさはり 拾へるならぬ 大君の 膳所の濱の

磯のうへに ござしみ立てる 石山の 石の中にし

籠りけむその璞あらたまを伊加賀崎いかど打出て  
 夜光る貴の眞玉と綿津見の海人のしわざに  
 成得けらしも

つどへたる八十の螢は七車てらす玉にもしかざらめやは  
 蘇子が後の赤壁のあそびのかたに

かななづきしぐるよ時の天雲のいかに晴れてか  
 山たかく月澄みのほり水落ちて岩ねあらはれ  
 寒き江に一葉をうけて酌酒のたゆたふ影に  
 三年経しきのふぞうつる其秋のこちくの調  
 其節を訴ふる如き木枯の聲吹きすさむ  
 大虚おほらに群れたるならぬ蘆鶴あしづりの近く飛びわたり  
 更くる夜を啼く聲長し浦浪の上  
 いかにかも鶴の毛衣けころもかへしけむ昔の夢の今も見えつよ

旋頭歌

五月の末なりけむ津國つのくになる伊丹いたみの里に有りてい  
 たき病にかよりていと心ほそくおほえける時駿  
 河守しけのぶ都よりくだり來てきよもあへず何  
 はおきてなどいへるをいとかたじけなみ侍りて  
 よめる

あらはれて見ゆる夏野の一もとすよき

大かたは穂に出づるときほにや出づらむ

木權の花を見て

いけ垣の小杉が中のあさがほ權の花

色のみをむかしはいひし朝がほのはな  
 大嘗會おこなはれける其夜ことにのどかなりけ

ばれよみ侍りける

大君の 大なめ祭 きこしめす夜と

霜雪は 憚る空に 月ぞ照りたる

至日に着袴いはひける人のもとにて

垂乳根の 末ゆたかにと たよせる袴

日も長く ならん始の 今日きそめけむ

信濃國松本なる小林爲邦くすしの業まなびをへ

て故郷へかへらんとする馬のはなむけにおのれ

ひさうして白菊と名づけし硯を贈りけるによみ

てくはへたる

露ながら かるゝ世しらぬ しら菊の花

これもその 老いずしな濃の家づとにせよ

俳諧歌

社頭の春といふことをよめる

石上ふるのやしろに引くしめのまたあたらしき春は來にけり

いへの會始に家梅始開といふころを

道もなきわが庵なれど鶯のふみひらきたる梅のはつ花

御忌の比京を思ひやりて

吉水の大鐘の聲ひびくなり山のこゝろもうごくばかりに

題しらす

氷とけし池のおもてに小車のあや織りみだりはるさめぞふる

きどすなく山路のくれにほろくくと降出にける春の雨かな

賤がうつあら田の原をたつ見れば雁をもすきてかへすなりけり

とりとめしおのが心のあら駒も春の野原に放れけるはや

花みむとけふうちむれてのる駒も大そらの青はるの日のかけ  
 菜の花に蝶もたはれてねぶるらむ猫間の里の春の夕ぐれ  
 紙屋川おほろ月夜のうすすみにすきかへしたる浪の色哉  
 世の中はおほろ月夜をかざしにて花のすがたになりけるかな  
 山ざとに水こひどりの鳴く聲もさびしからぬは苗代なほしろのころ  
 すみれにはまけてみゆれどすまひ草とりすてがたき花の色かな  
 花ちりて春より夏にとぶ蝶の羽袖はさきも白し木がくれの里  
 みこし路の雪にさらしの夏衣かへたるけさは袂さむしも  
 うの花のかきねにほりし竹の子は雪の中のをえたるなりけり  
 道の邊にとりてすてたる若苗のあまり豊ゆたけき世にこそ有りけれ  
 さよ更けてながると星の影のうちに聲せで飛ぶは螢なりけり  
 落したる誰たが種ならむ山ざとの垣かきねがくれのなでしこのはな  
 蓮葉はちすはのうへ野をたれか忍ばすのいける世ながら樂しからずや

行きなづむ駒のわたりの夕がほの花のあるじよやどりかせ山  
 山賤やまがぢもうまきひる寢ねの時ならし瓜うりはむからす追ふ人もなし  
 閨ひなの戸をそたく水雞くひな人まねのたはわざにくし夏のよなく  
 五月雨さみだれにぬれくきけばほととぎす我も鳴きつる心地こそすれ  
 ほととぎす汝なれも矢橋やばせの市に出でてくつてとのみも鳴きわたるかな  
 すぐろくの市場はいかにさわけとかふりこほしける夕立の雨  
 夕立のそらふみさきし鳴神のなごりともなき月のかげかな  
 涼みにと誰をさそはむ獨だにみるほどもなき夏の夜の月  
 照る月に夏をわすれし木の間よりおどろかしける蟬のひと聲  
 いたづらにことしもなかばめぐる輪のぬけむかたなき身の齡かな  
 江戸にありけるとしあまた鳴きつるせみの聲あ  
 るあしたふつに聞えずなりければよめる  
 この世をばつくぐうしと鳴すてて又いかさまに身をばかへけむ

歌むすびしけるとき草花早といふ事を  
世中はくちさが野なるをみなへし秋にあへりと人に知らるな

蘭の枝を

ふぢばかまをりめみだれて見ゆるかな誰心なく手をばふれけむ  
題しらす

さしこめてまだ夜を残す柴の戸をおそしとひらく朝がほの花  
姑しうごめにつまれしよめ菜あはれその時過ぎてこそ花咲きにけれ  
花見ればとびたつ小野のいなごまる人の子にこそかはらざりけれ  
はたおりめ梢かりこむ木ばさみの音に終日ひねちまじりてぞ鳴く  
あながましかまのしりへのきりふすよなべのつどりさせと鳴くなり  
故郷にたまくと來つる我を見てこほれかゝれる庭のしらつゆ  
山の端に出くる月の影見ればわれさへいまぞあらはれにける  
大空はおほかた雲にやどられて所せけなる月のかけかな

飛こゆるかりのつばさやかかけつらむたな引きれしみねの横雲  
秋かぜのしらべて拂ふ松の葉の落たる見れば琴柱ことうなりけり  
箱根山關もる人も朝ぎりのわたくし雨にあざむかれつよ  
誰とたがうちかはすらむ夜もすがら砧きねの聲のかたおろしなる  
闇ながらはれたる空のむら時雨ほしの降るかと思はれつよ  
夜もすがら玉の聲ともさゆるかな月吹すさむ木がらしのかぜ  
たよきつる氷の下にくだけむわれても見ゆる月の影かな  
朝ごほりとくるを待ちてうごくかな老はみわたの魚ならねども  
冬がれの梢の雪のはつ花はちりそめてこそ咲初にけれ  
一月樓にありし時雪を  
鴨河にさらしくて青柳のいとさへしろくなりける哉  
題しらす  
くれ竹の隣へかへる聲すなり日かけに雪やとけわたるらむ

琴ならぬ桐の火桶は聲もなし咲きだにおこせ夜半の松風  
徒いたちにふりゆく人を行く年はかへりてをしきものと見るらむ  
わが齡むかしの數にかへらめや此いり豆に花はさくとも  
思ふとはおもふ人にも知られじとおもふは誰を思ふなるらむ  
はやくより心あへりと思ひしはうたてすなはち戀にざりける  
よき人をよしのよく見し夕よりよし野の花の面かけにたつ  
山の端にくるれば見ゆる三日月のあなしらふし人のいつはり  
入かたの天の岩戸のかくれてもほそめに見まくほしき君かな  
戀はいい神さへ聞馴れて久しきものとすてておくらむ  
春がすみ絶間になびく青柳のめより色にはあらはれにけり  
むつ言を霞やたちて聞きつらむ野にも山にもかくれなき戀  
思ふ事ありのあなうとなけくまにくづれにけりな人めつよみは  
あふことのかたき中にはくすの木の枕も石となりぬべらなり

あらかねの心も戀にわかかへりあつき涙とこほれけるかな  
小貝もる濱つゞら籠かごにるる砂の下にはらく音はなかれつよ  
わぎも子がむねに結べるまへ帯のとけずも物を思ひ顔なる  
花つむと折かへしたる振袖にたまるは人のこよるなりけり  
打とけて人とぬるくねぬなはのねたしや世をば知らず顔なり  
なやにるてこがひする子のつまえら撰み田もやりあぜもやるといふものを  
をとめらが未きりはたり織るはたのしねとやせめてつれなかるらむ  
おほかみの子はふところにいれぬとも思ひかけじといひし人妻  
ふきたてて君がこちくの笛の音に枕の塵ぞたゞよひにける  
越えがたき忍びがへしのうらくぎのうちうらみても立かへれとや  
生田河鳥だに射ても見すべきを今は弓引くたちからもなし  
いなといひてせにかはりしも早河のすみはてじとは思ひつる事  
こむ世まであざむかれても蓮葉はらすの露を玉とは何たのみけむ



妻木うるかたに

めせやめせゆふけの妻木はやくめせかへるさ遠し大原の里

題しらす

三島江に生ふる眞菅を鴉はどりはかさにもぬはでかづくなるかな  
心には何をいかるか知らねども囀さへつる聲のおもしろけなる  
ゑのころははやもあるじを見しりけりよべは尾ふりの嬉し顔なる  
猫の子はねすみとるまでなりにけり何にくらせし月日なるらむ  
人疎うまむ門には市もなさどりきよをあきものといつなりにけむ  
世の中をいかに杉戸のふし多みあなたもあなたと歎くころかな  
わづらはしいざ世中にかくれ笠きつよやへなん雨ふらずとも  
かけすてし鏡の面に影ふれてたそやと我をおどろかれぬる  
いとわかき時なりけん國をはなれて五條あたり  
のふせやにかくれすみて物まなびしてありける

をきよつけて故郷なる友のもとよりさてあるべ  
きかははやく歸りきてなどいひこしける時によ  
める

わびて世にふるやの軒の繩すだれくちはつるまでかよるべしやは

題不知

大堰河とな瀬の上にあらはれて泥にはひかぬ龜の尾の山  
高宮の松原ごしに見わたせばすきびたひなる冠かうぶりのやま  
月と日をふたみになして玉くしけ明け行く浦の名にこそありけれ

津國鮎川なる厭求法師在世の時鳥の聲を聞きて

悟道のことありけりとて今年その百回忌の追善

にからすといふ題を出してある人歌すよめける

によりてつかはしける

鮎川あひがはのるぐひの鴉かきすうにもあらず無むにもあらずと鳴きやしつらむ

桂園一枝終

桂園の一枝は、我が國の文壇に於ては、  
 最も重要な地位を占めてゐる。其の  
 由來は、遠く鎌倉時代の後、室町  
 時代に至りては、更にその光輝を  
 増進せしむるに至りし。其の由來  
 は、遠く鎌倉時代の後、室町時代  
 に至りては、更にその光輝を増進  
 せしむるに至りし。其の由來は、  
 遠く鎌倉時代の後、室町時代に至  
 りては、更にその光輝を増進せし  
 むるに至りし。其の由來は、遠く  
 鎌倉時代の後、室町時代に至りて  
 は、更にその光輝を増進せしむる  
 に至りし。其の由來は、遠く鎌倉  
 時代の後、室町時代に至りては、  
 更にその光輝を増進せしむるに  
 至りし。其の由來は、遠く鎌倉時  
 代の後、室町時代に至りては、更  
 にその光輝を増進せしむるに至り  
 し。其の由來は、遠く鎌倉時代の  
 後、室町時代に至りては、更にそ  
 の光輝を増進せしむるに至りし。

大正七年十月十五日印刷  
 大正七年十月十八日發行  
 有朋堂文庫  
 加茂翁家集  
 (非賣品)

不許複製

編輯者 塚本哲三  
 東京府下大久保町西大久保二百三十六番地  
 發行所 三浦理  
 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
 印刷所 有朋堂印刷部  
 東京市神田區錦町三丁目九番地  
 發行所 有朋堂書店  
 東京市神田區錦町一丁目十九番地

大清宣統元年正月十五日

大清宣統元年正月十五日

大清宣統元年正月十五日

大清宣統元年正月十五日

大清宣統元年正月十五日

大清宣統元年正月十五日

大清宣統元年正月十五日

(宣統元年)



